

「二〇一九年度お茶の水女子大学本試験 第一問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① デカルトは、確かなものを見出すためにすべてを疑うということをみずからに <sup>a</sup>カし、その結論として、「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」と述べている。思考するかぎりにおいて、「わたしの存在」は、原理的に疑い得ないというのである（『方法序説』第四部）。

② デカルトがすべてを疑ったとき、自分の身体の存在をも疑ったのであるから、かれはただ自分の思考のみから「わたしの存在」が確かであると結論したわけである。はたしてそのようなことが可能なのか。というのも、まっさきに気になるのは「わたし」という語が指しているものは何であるかということである。デカルトはそれをどのようにして知ったのか。

③ 「わたし」という語は、奇妙な語である。たとえば「樹木」であれば、多くのひとが樹木というおなじ対象をその語によって指差すことができる。他方、「佐藤さん」のような固有名であれば、たとえ同姓のひとがいなくても、ひとは知人のそのひとだけを指差すだろう。

④ ところが「わたし」については、自分自身を指すつもりで語っているのだが、他人が「わたし」という語を使ったからといって、自分自身が呼ばれたとは思わない。逆に「わたしはジングスカンです」などと述べたなら、——歴史上そう述べることでできるひとが一人いたのは確かだが——、わたしは精神科を受診するように勧められることだろう。

⑤ 「わたし」という語は、実は、言葉の表現の外にあって、それを語っているひとを指し示す語なのである。それぞれのひとに〈わたし〉があり、その意味は、言葉で述べられていることが、述べている当の人物にあってはまるということである。

⑥ 「ひとは仕事をもっている」と述べるとき、必ずしも「わたしは仕事をもっている」という意味ではないが、「わたしは仕事をもっていない」ということを含んでいるわけではない。逆に、「わたしは仕事をもっている」と述べれば、「仕事をもっていないひとといるが、わたしはそうではない」ということを意味している。他方で、そのおなじ表現で、「あなたは仕事をもっているか？」ということや、「わたしは以前は仕事をもっていないかった」ということや、「忙しくてあなたの希望には添えない」ということをも含意させることができるであろう。

⑦ 何をいいたいかというと、「わたし」は、「わたし」単独では何も指し示してはいないということである。それは、語るべきことがあって、それが語られている相手や状況において、その言葉の言外の意味を示すものとしてしか使用されていないということである。デカルトのように懐疑を尽くしていく場合には、当然ながら消え去ってしまうはずの曖昧な語なのである。

⑧ 幼児が、しばしば自分のことを「わたし」とはいわず、自分の固有名で述べることはよく知られている。言葉の通例の用法によって、呼ばれる固有名が自分であるとするのは間違いではないのだが、幼児はやがて、それを「わたし」というような語でいい替えるようになる。

⑨ それ以前、「わたし」の指す〈わたし〉がどうでもいいようなとき、そこでは何が起こっていたのだろうか。そこには、世界に事物や生物たちしか存在しなくて、自分もまたそのひとつでしかないという、幼児には、お

とき話のようなファンタジー（空想ないし幻想上の出来事）が生きられていたに違いない。

10 言葉でもって完結した世界が物語られるとき、幼児は、事物や生物たちもおしゃべりをする、ただひとつの世界のなかで生きることができる。そのなかに固有名の自分がいて、生きてそれを聞いている自分と同一かどうかを気にしないでいられるからであり、だれが語っているかを意識しないでいられるからである。

11 しかし、そこに、だれか他人が登場してきて、そのファンタジーが否定されるといふ事件がいつか起こる。幼児は、そのことを通じて、自分には経験されていない世界が、それを語る人物の背後に控えていることに気づかされる。（わたし）とは、自分とは異なつて語る何ものかのことである。ファンタジーのなかの魔術師ではなく、ファンタジーそのものを破壊したり、与えてくれる何ものかである。

12 幼児は「物語をして」といつておとなにせがむのだが、それはおとなが新たなファンタジーの扉を開いてくれるからである。だが、おとなは突然、「もう寝なさい」といいはじめ。ファンタジーは、幼児に物語という世界経験の土台を与えながら、その破壊を通じて、幼児を現実の世界へと連れ出すのだ。

13 世界とは、現実とファンタジーの交錯である。おとなになつてもファンタジーの世界に潜り込んでしまふひともいれば、恋人との二人だけのファンタジーに ヒタつているひともいる。家族の団欒も、親子の愛についてのファンタジーとして語られる。父も母も、それぞれただの人間であると知れることは、子どもにとつての、ひとつの重大な課題である。父も母も、パンノウに幼児を支え、助けることができるわけではないのだ。

14 サルトルに、「他人は ジゴクだ」という有名な一句がある（『出口なし』）。その意味では、他人とは暴力なのである。ファンタジーの、荒ぶる強面の破壊者である。否、もつとずる賢くて、ファンタジーのなかに入り込んでかわいい動物を演じたりしながら、最後には冷酷な現実へとひとを突き落とす。とりわけ他人を利用しようとするひとにとつては、それはありふれた手段である。

15 だが、じかに現われる他人、ファンタジーの破壊者の暴力は、それとは質が異なっている。それは、ある意味では、ただ、現実をともに生きようと呼びかける親ないし他人なのだが、幼児にとつては、その他人こそ恐怖である。

16 「わたしは……」とそのひとが口に出した瞬間に、それはファンタジーを破壊するだけではなく、現実の世界には「砕けた鏡」（クザーヌス）のように数多くの（わたし）がいて、決して世界がひとつのファンタジーに完結したりはしないのだということをお教えようとしているのだからである。

17 世界にはたくさんの（わたし）がいて、わたしもその一人なのだということをお知らせする。他人が自分のファンタジーを破壊するとともに、自分も他人のファンタジーを破壊することができる。とはいへ、それを実行して、もし他人がそれを拒絶したときには、（わたし）のファンタジーの世界は自己崩壊して砕け散り、（わたし）は残ったファンタジーのかけらを急いで掻き集めるしかないであろう。しかし、それはどのようにしてか。

18 ヒュームが述べているように、ひとは「自我」そのものを経験することはない（『人間本性論』第一篇付論）。

「自我とは知覚の束にすぎない」（第一篇第四部第六節）のだからである。この一句は、哲学史上の最も有名なスキャンダルのひとつとなったが、自我が存在しないということは、おそらくは、つぎのようなことである。

19) <sup>4</sup>ひとは自我の本質として、意志をもつということを挙げるかもしれない。しかし、意志は、自分自身にとつては、自分がこれからすることを宣言する言葉と、その言葉をしばしば思い出すという程度のことではない。思い出すかどうかは意志によってできることではないのだから、行動をコントロールするものとしての意志が存在するわけではない。

70 [20] 他方、意志は、他人の言動の目的合理性や一貫性や整合性を読み取られる場合に存在すると想定されるものであるが、その言動のさなか、心中に、それらを意識した言語表現があったかどうかはどうでもいいことである。ウソをついているかどうかは、それとは別の、誠実さについての判断である。意志は、行動を知って行おこなったかそうでないかを区別するための帰責論的、法的な概念なのであり、日常生活に、その法的思考を適用したものにすぎない。意志は、法が成立したあとに生まれた概念であり、人間の本性にあるようなものではない。

75 [21] むしろ、自我という意味での「わたし」とは、経験のなかに見出だされる何ものかではなく、世界と自分の未分化を破壊する「他なるもの」の暴力の「ゲンセン」として、他人の身体に原因として仮想された人格的同性（パーソナル・アイデンティティ）のことなのである。それを「自我」と呼ぶのであり、他人が自分の言動にどう反応しているかを推察することで、それが自分にもあると仮想するのである。

80 [22] つまり、こういうことだ。風景のなかに他人の身体があつて、独特の動作をするばかりでなく、自分の方に向かつて働きかけてくる。自分の背後にだれもないとすれば、それは自分に向かつてそうしているのであり、その自分が含まれている風景を想像するならば、他人に働きかけ得る自分の身体がそこに含まれているに違いない。つまり、「語りかけられている」ということが分かった瞬間に、語る「わたし」がいるという、そのことがはつきりと理解されることになるであろう。

85 [23] 他人の身体に見出だされたその自我は、いま他人の言動を捉えようとしているこの自分の経験に基づいて捉えられた他人のことである。他人の自我は、推測であるばかりでなく、言葉を語り、他人を主題にする際の前提であり、一切の人間関係と政治的問題がはじまる情動の始原である。

[24] 「わたし」という語で、人間はみな対等に行動の原因となるばかりか、その振舞のそれぞれを、「運動」ではなく、「行動」として捉えられるようになる。そこからはじめて、社会のなかで生きている「わたし」が、それであるだけでなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようにするのである。

90 [25] ひとはやがて、自分の自我について問われ、ただちに経験のなかにありありと自分を見出だすことができるようになるのだが、それはすでに言葉をしゃべり、思考することができるようになっているからである。

[26] したがって、デカルトの、「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」というときの「わたし」は、すでに社会に生まれてきていて、言葉を介して他者と出会っている「わたし」のことでなければならぬ。<sup>5</sup>

95 おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した「自我」なるものは存在しない。もし自我を事物のように捉え、その性質を論じるなら、「わたしとは何か」を見失ってしまうことになるだろう。

（船木亨『現代思想講義——人間の終焉と近未来社会のゆくえ』による）

注

○デカルト——ルネ・デカルト René Descartes（一五九六—一六五〇）。フランスの哲学者。

○サルトル——ジャン・ポール・サルトル Jean-Paul Sartre (一九〇五—一九八〇)。フランスの哲学者。  
○クザーヌス——ニコラウス・クザーヌス Nicolaus Cusanus (一四〇一—一四六四)。ドイツの哲学者。  
○ヒューム——デイビッド・ヒューム David Hume (一七一一—一七七六)。イギリスの哲学者。

問1 傍線①について、「わたし」という語が指しているものは何であるか」という問いに対する最も適切な答えとなる本文中の部分を五〇字(句読点を含む)以内で抜き出せ。

問2 傍線②について、「ただひとつの世界のなかで生きることができるとはどのような世界だと筆者は述べているのか説明せよ。

問3 傍線③「現実をともに生きようと呼びかける親ないし他人」が幼児にとって「恐怖」となるのはなぜか、「ともに」に傍点がついていることを踏まえて説明せよ。

問4 傍線④の「自我の本質として、意志をもつ」という考え方に対して、筆者はどう反論しているのか答えよ。

問5 傍線⑤の「おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した「自我」なるもの」に対して、筆者の考える「自我」とはどういうものなのか、整理してまとめよ。

問6 波線「社会のなかで生きている(わたし)が、それであるだけではなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようにするのである」とあるが、これに関するあなた自身の経験について、三〇〇字程度で述べよ。

問7 傍線aの片仮名を漢字に直せ。

【二〇一九年度お茶の水女子大学本試験 第一問】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ex1  
① デカルトは、確かなものを見出すためにすべてを疑うということのみならず、<sup>a</sup>「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」と述べている。思考するかぎりにおいて、「わたしの存在」は、原理的に疑い得ないものである(『方法序説』第四部)。

② デカルトがすべてを疑ったとき、自分の身体の存在をも疑ったのであるから、かれはただ自分の思考のみから「わたしの存在」が確かであると結論したわけである。はたしてそのようなことが可能なのか。というのも、まっさきに気になるのは「わたし」という語が指しているものは何であるかということである。デカルトはそれをどのようにして知ったのか。

③ 「わたし」という語は、奇妙な語である。たとえば「樹木」であれば、多くのひとが樹木というおなじ対象をその語によって指差<sup>ゆびさ</sup>することができる。他方、「佐藤さん」のような固有名であれば、たとえ同姓のひとがいなくても、ひとは知人のそのひとだけを指差すだろう。

ex2  
④ **ところが**「わたし」については、自分自身を指すつもりで語っているのだが、他人が「わたし」という語を使ったからといって、自分自身が呼ばれたとは思わない。逆に「わたしはジンスカンです」などと述べたなら、——歴史上そう述べることでできるひとが一人いたのは確かだが——、わたしは精神科を受診するよ<sup>a</sup>うに勧められることだろう。

⑤ 「わたし」という語は、実は、言葉の表現の外にあって、それを語っているひとを指し示す語**なのである**。それぞれのひとに(わたし)があり、その意味は、言葉で述べられていることが、述べている当の人物にあってはまるということである。

ex3  
⑥ 「ひとは仕事をもっている」と述べるとき、必ずしも「わたしは仕事をもっている」という意味ではないが、「わたしは仕事をもっていない」ということを含んでいるわけではない。逆に、「わたしは仕事をもっている」と述べれば、「仕事をもっていないひともあるが、わたしはそうではない」ということを意味している。

他方で、そのおなじ表現で、「あなたは仕事をもっているか?」ということや、「わたしは以前は仕事をもっていなかった」ということや、「忙しくてあなたの希望には添えない」ということをも含意させることができるであろう。

ex4  
⑦ **何をいいたいかというと**、「わたし」は、「わたし」単独では何も指し示してはいないということである。

それは、語るべきことがあって、それが語られている相手や状況において、その言葉の言外の意味を示すものとしてしか使用されていないということである。デカルトのように懐疑を尽くしていく場合には、当然ながら消え去ってしまうはずの曖昧な語**なのである**。

⑧ 幼児が、しばしば自分のことを「わたし」とはいわず、自分の固有名で述べることはよく知られている。言葉の通例の用法によって、呼ばれる固有名が自分であるとするのは間違いではないのだが、幼児はやがて、それを「わたし」というような語でいい替えるようになる。

30

⑨ それ以前、「わたし」の指す(わたし)がどうでもいいうようなとき、そこでは何が起こっていたのだろうか。

そこには、世界に事物や生物たちしか存在しなくて、自分もまたそのひとつでしかないという、幼児には、お

25

20

とき話のようなファンタジー（空想ないし幻想上の出来事）が生きられていたに違いない。

10 言葉でもって完結した世界が物語られるとき、**幼児は、事物や生物たちもおしやべりする、**<sup>(r1)</sup> **ただ**

35

**ひとつの世界のなかで生きることが**できる。そのなかに固有名の自分がいて、生きてそれを聞いている自分と

同一かどうかを気にしないでいられるからであり、だれが語っているかを意識しないでいられるからである。

11 **しかし**、そこに、だれか他人が登場してきて、そのファンタジーが否定されるといふ事件がいつか起こる。

幼児は、そのことを通じて、自分には経験されていない世界が、それを語る人物の背後に控えていることに気づかされる。「わたし」とは、<sup>(r2)</sup> **自分とは異なって語る何ものか**のことである。ファンタジーのなかの魔術

40

師ではなく、ファンタジーそのものを破壊したり、与えてくれる何ものかである。

12 幼児は「物語をして」といつておとなにせがむのだが、それはおとなが新たなファンタジーの扉を開いてくれるからである。**だが**、おとなは突然、「もう寝なさい」といいはじめる。ファンタジーは、幼児に物語と

いう世界経験の土台を与えながら、その破壊を通じて、幼児を現実の世界へと連れ出す**のだ**。

13 世界とは、現実とファンタジーの交錯である。おとなになってもファンタジーの世界に潜り込んでしまっ

45

ひともいれば、恋人との二人だけのファンタジーに <sup>b</sup>ヒタっているひともいる。家族の**団欒**も、親子の愛につ

いてのファンタジーとして語られる。父も母も、それぞれただの人間であると知れることは、子どもにとつての、ひとつの重大な課題である。父も母も、<sup>c</sup>パンノウに幼児を支え、助けることができるわけではないのだ。

14 <sup>ex5</sup>サルトルに、「他人は <sup>d</sup>「ジゴクだ」という有名な一句がある（『出口なし』）。その意味では、他人とは暴力なのである。ファンタジーの、荒ぶる**強面**の破壊者である。否、もつとずる賢くて、ファンタジーのなかに

50

入り込んでかわいいた動物を演じたりしながら、最後には冷酷な現実へとひとを突き落とす。とりわけ他人を利用しようとするひとにとつては、それはありふれた手段である。

15 **だが**、じかに現われる他人、ファンタジーの破壊者の暴力は、それとは質が異なっている。それは、ある意味では、ただ、<sup>e</sup> **現実をともに生きようと呼びかける親ないし他人**なのだが、幼児にとつては、その他人こそ恐怖である。

55

16 「わたしは……」とそのひとが口に出した瞬間に、それはファンタジーを破壊するだけではなく、<sup>ex6</sup> **現実の世界には <sup>(r3)</sup>「砕けた鏡」(「タザーヌス」のように数多くの「わたし」)がいて、決して世界がひとつのファンタジーに完結したりはしないのだ**ということを教えようとしているのだからである。

60

17 世界にはたくさんの「わたし」がいて、わたしもその**一人の**だということを幼児は知る。他人が自分のファンタジーを破壊するとともに、自分も他人のファンタジーを破壊することができる。とはいえ、それを実行して、もし他人がそれを拒絶したときには、<sup>(r4)</sup> **「わたし」のファンタジーの世界は自己崩壊して砕け散り**、「わたし」は残ったファンタジーのかけらを急いで掻き集めるしかないであろう。**しかし**、それはどのようにしてか。

18 <sup>ex7</sup>ヒュームが述べているように、ひとは「自我」そのものを経験することはない（『人間本性論』第一篇付論）。

65

「自我とは知覚の束にすぎない」（第一篇第四部第六節）のだからである。この一句は、哲学史上の最も有名なスキャンダルのひとつとなったが、自我が存在しないということは、おそらくは、つぎのようなことである。

19) <sup>4</sup>ひとは自我の本質として、意志をもつということを挙げるかもしれない。しかし、意志は、自分自身にとっては、自分がこれからすることを宣言する言葉と、その言葉をしばしば思い出すという程度のことではない。思い出すかどうかは意志によってできることではないのだから、行動をコントロールするものとしての意志が存在するわけではない。

70) **20** 他方、意志は、他人の言動の目的合理性や一貫性や整合性を読み取られる場合に存在すると想定されるものであるが、その言動のさなか、心中に、それらを意識した言語表現があったかどうかはどうでもいいことである。ウソをついているかどうかは、それとは別の、誠実さについての判断である。意志は、行動を知って行ったかそうでないかを区別するための帰責論的、法的な概念なのであり、日常生活に、その法的思考を適用したものにすぎない。意志は、法が成立したあとに生まれた概念であり、人間の本性にあるようなものではない。

75) **21** **むしろ、自我という意味での「わたし」とは、経験のなかに見出だされる何ものかではなく、** <sup>(r5)</sup> **世界と自分の未分化を破壊する「他なるもの」の暴力の** <sup>e</sup> **ゲンセンとして、他人の身体に原因として仮想された人格的同一性（パーソナル・アイデンティティ）のことなのである。** それを「自我」と呼ぶのであり、他人が自分の言動にどう反応しているかを推察することで、それが自分にもあると仮想するのである。

80) **22** **つまり、いづいづのことだ。風景のなかに他人の身体があつて、独特の動作をするばかりでなく、自分の方に向かつて働きかけてくる。** 自分の背後にだれもないとすれば、それは自分に向かつてそうしているのであり、その自分が含まれている風景を想像するならば、他人に働きかけ得る自分の身体がそこに含まれているに違いない。つまり、「語りかけられている」ということが分かった瞬間に、語る「わたし」がいるということがはつきりと理解されることになるであろう。

85) **23** 他人の身体に見出だされたその自我は、いま他人の言動を捉えようとしているこの自分の経験に基づいて捉えられた他人のことである。他人の自我は、推測であるばかりでなく、言葉を語り、他人を主題にする際の前提であり、一切の人間関係と政治的問題がはじまる情動の始原である。

**24** 「わたし」という語で、人間はみな対等に行動の原因となるばかりか、その振舞のそれぞれを、「運動」ではなく、「行動」として捉えられるようになる。そこからはじめて、社会のなかで生きている「わたし」がそれであるだけでなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようになるのである。

90) **25** **ひとはやがて、自分の自我について問われ、ただちに経験のなかにありありと自分を見出だすことができるようになるのだが、それはすでに言葉をしゃべり、思考することができるようになっているからである。**

<sup>exo</sup> **26** **したがって、** デカルトの、「わたしは思考する、それゆえにわたしは存在する」というときの「わたし」は、すでに社会に生まれてきていて、言葉を介して他者と出会っている「わたし」のことでなければならぬ。おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した「自我」なるものは存在しない。もし自我を事物のように捉え、その性質を論じるなら、「わたしとは何か」を見失ってしまうことになるだろう。

（船木亨『現代思想講義——人間の終焉と近未来社会のゆくえ』による）

注

○デカルト——ルネ・デカルト René Descartes（一五九六—一六五〇）。フランスの哲学者。

○サルトル——ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre（一九〇五—一九八〇）。フランスの哲学者。

○クザーヌス——ニコラウス・クザーヌス Nicolaus Cusanus (一四〇一—一四六四)。ドイツの哲学者。  
○ヒューム——デイビッド・ヒューム David Hume (一七一一—一七七六)。イギリスの哲学者。

問1 傍線①について、「わたし」という語が指しているものは何であるか」という問いに対する最も適切な答えとなる本文中の部分を五〇字(句読点を含む)以内で抜き出せ。

問2 傍線②について、「ただひとつの世界のなかで生きることができるとはどのような世界だと筆者は述べているのか説明せよ。

問3 傍線③「現実をともに生きようと呼びかける親ないし他人」が幼児にとって「恐怖」となるのはなぜか、「ともに」に傍点がついていることを踏まえて説明せよ。

問4 傍線④の「自我の本質として、意志をもつ」という考え方に対して、筆者はどう反論しているのか答えよ。

問5 傍線⑤の「おのずから理性的であるような、孤立し、それ自身に完結した「自我」なるもの」に対して、筆者の考える「自我」とはどういうものなのか、整理してまとめよ。

問6 波線「社会のなかで生きている(わたし)が、それであるだけではなく、「社会に生まれてきた」とか「社会に出る」とか、意識できるようにするのである」とあるが、これに関するあなた自身の経験について、三〇〇字程度で述べよ。

問7 傍線 a ~ e の片仮名を漢字に直せ。